

第1講

小幡道昭

2018年4月12日

経済原論の方法

変容と発展 2

- しかし、逆に歴史的発展が、まったく理論の対象にならないというわけではない。
- 「構造変化」の可能性は理論的に説明できる（どういう分岐なら可能か、逆にどういうことは不可能か）。
- たとえば、生き物の「進化」に関して、どのようにして生じるのか、一般的な仕組みは説明できる。進化論でも、変異と適応の一般理論は存在しうるだろう。
- しかし、1億年後の生物世界は...？ こうした「歴史的」現象を予測することはできない（そもそも「予測」の対象ではない）。
- とくに、人間社会の将来については、個人の意思決定とは異なるが、やはり主体的な決定の自由がある。
- 「社会科学」という場合の＜科学＞の意味。

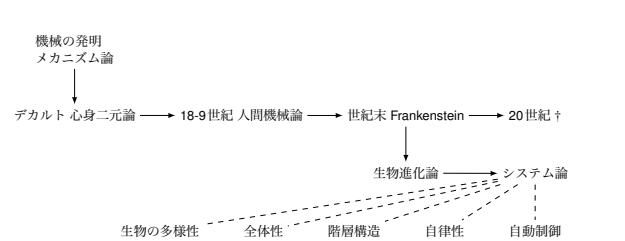
経済原論の方法

変容論のポイント

- 1 メタモデル
  - 変容を扱うには、個別のモデルではなく、
  - 複数のモデルを統合するモデルが必要
  - モデルのモデル＝meta modelとよんでみた。
- 2 階層モデル（トータル・モデル）
  - 変容は、部分の「変化」に分解できない。
  - 構造変化は「全体」の「変容」
  - 「全体」という概念のむずかしさ
  - テキストの「メカニズムとシステム」の項を読んでみよう。

経済原論の方法

メカニズムとシステム



経済原論の方法

変容と発展 1

- 「資本主義」とは何か？
- 異なる時期に、異なる地域に、異なる条件のもとで誕生。
- 重要で面白い問題だが、ここでは話す時間がありません。テキスト2～7ページを読んでみてください。
- とにかく間歇的に「状態」を変えてきた。
- 時間の流れのなかで、元には戻らない変化をしてきた。この不可逆的な変化を「発展」という。
- 不可逆的な「発展」が、すべてそのまま、演繹的な理論で説明できるわけではない。
- なぜか？ 人間社会の歴史的発展は、（AならBになるという）完全な必然性をもつわけではないから。
- 歴史に関する決定論は誤り。

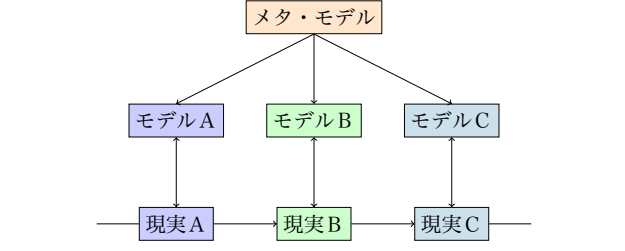
経済原論の方法

変容と発展 3

- では、どうしたらよいのか？ ....「変容論的アプローチ」
- 「変わる力と変える力」（テキスト9頁）。内因と外因の相互作用。
- 不可逆的な歴史的「発展」と、その基礎に存在する可能性の構造として「変容」を区別すること。
- 「経済原論」の対象は「変容」まで。
- 経済原論をベースに、「外的条件」で方向づけられる「発展」を分析する「段階論」。

経済原論の方法

メタ・モデル



経済原論の方法

経済学とシステム論

